

中学3年生

「国際理解と平和Ⅰ」 ～人々の心に触れて、平和の尊さを考えよう～

藤 田 高 弘・杉 本 雅 子
岡 村 明・原 英 俊
佐 藤 喜世恵

【抄録】 中学3年では広島・大久野島への研究旅行を中心に、国際理解と平和についての総合学習を行った。戦争体験者の聞き取り調査をはじめ人々に関わり合う様々な企画を織りまぜながら、年間を通してグループで学習をすすめ、年度末には、研究集録をまとめた。

【キーワード】 平和 戦争 体験 杉原千畝 満州 グループ学習 広島 大久野島

I. 学年テーマと目標

本校6カ年の総合人間科のカリキュラムの中で、中学3年では、「国際理解と平和Ⅰ」を学ぶことになっている。このテーマは、本校の中学3年生が広島へ研究旅行に行くことをふまえ、他学年とのバランスを考え、高校2年時の沖縄研究旅行に発展するよう考慮し設定されたものである。

本年、国際理解と平和について学習を進めるにあたり留意したことは、教科書や書物やインターネットで学ぶだけでなく、フィールドワークや講演会といった人と触れ合い生の声を聞く体験を通して考えるよう計画・指導していったことである。

本学年の生徒の実態として、自己表現をすることは1・2年の総合人間科の積み重ねから比較的優れている面はあるものの、他人の考えをしっかりと聞き、その気持ちを考えて行動に移すことは十分とは言えない。日頃の授業態度についても面白おかしくということが先行しがちで真剣に物事をとらえて考えを深めようとする雰囲気は今一歩欠けているように思われた。今年度のテーマで戦争の悲惨な実態を学習する中で、戦時下の人々の心の痛みや、悲しみに直に触れさせ、物事を真剣にとらえたり考えたりさせるには、絶好の機会であると考えた。また、1・2年は、生徒一人一人の興味・関心を尊重した個人研究が中心であったが、広島のフィールドワークはグループ研究が中心となるため、そのテーマ決めや事前学習・研究発表等、全ての場面において「他との協力」が不可欠になってくる。そして、この「他との協力」ということが、上に述べた3年生の問題を解決する糸口になると考え、サブテーマ ～人々の心に触れて、平和の尊さを考えよう～を設定した。

この「人々の心に触れ」というのは、戦争体験者と関わることを通して学習を深めるとともに、さらにもっと

身近にいる生徒同志の心の交流を促進させようという生徒指導面のねらいも含まれている。グループ研究を通して、生徒が他を思いやったり、労ったりしながら、協力しあって平和についての理解を深めることに重点を置き指導にあたることにした。

II. 学習の経過

- | | |
|--------|-------------------------------------|
| 4月18日 | オリエンテーション、ビデオ「はだしのゲン」、アンケート、課題説明 |
| 5月2日 | ユダヤ人迫害と杉原千畝 |
| 5月23日 | 身近な戦争体験調査の発表、増田教授の授業「原爆の被害状況」 |
| 5月24日 | 遠足 杉原千畝記念館・リトルワールド |
| 6月6日 | 三雲さんの講演会「満州の生活・引揚者・孤児としての飢餓体験」 |
| 6月28日 | 演劇鑑賞 劇団銅鑼「センボスギハラ」 |
| 7月4日 | 原爆のビデオ「長崎の子」、フィールドワークの役割分担 |
| 9月12日 | フィールドワーク先の事前学習の役割分担・調査事項の決定・アポ取り |
| 10月10日 | フィールドワークの事前学習の発表会 |
| 10月24日 | 研究旅行オリエンテーション、フィールドワーク先での行動計画・質問の確認 |
| 11月6日 | — 研究旅行（広島・大久野島） |
| 11月7日 | |
| 11月8日 | |
| 11月21日 | 研究旅行の資料整理、発表用原稿づくり礼状書き |
| 12月5日 | 研究発表会用資料・原稿づくり |
| 1月9日 | 研究発表会 |
| 1月30日 | 集録原稿下書き |
| 2月13日 | 集録原稿清書 |
| 3月6日 | 研究のまとめ、アンケート |

Ⅲ. 生徒の取り組みの様子

1. 戦争についての理解を深める学習

(1)身近な人の戦争体験調査

中学3年生にとって、国際理解と平和学習は初めてであり異文化の違いや戦争についての理解は十分とは言えない。そこで、第2次世界大戦についての知識理解をベースに身近な人から戦争体験を聞き、生徒個人の生活体験と比較させながら戦争についての理解を深めることから導入していくことが望ましいと考えた。

4月当初のオリエンテーションで、「身近な人の戦争体験調査」の課題を説明するとともに、保護者に向けては、その課題の趣旨を理解していただき協力を依頼した。今の中学3年生にとっては親の世代も戦後生まれであり、祖父母に戦争の話を書くということが中心となったが、中には、愛知県在住の広島に被爆体験者に直接会って調査をした生徒もあり、その生々しい被爆体験の発表は生徒の心に平和の尊さを深くしみいらせることとなった。

<Tさんのクラス発表より>

私は、被爆者と被爆2世の方にお話をうかがいました。昨年5月、愛知県でも数少ない被爆者の一人である鈴木光也さんにインタビューしました。

鈴木さんは私の祖父の知り合いで愛知県一宮市に住んでいる方です。終戦の年に海軍に入り、広島県廿日市市というところにいました。原爆投下後に広島市に向かい、一日10時間の労働を3日間現地でを行い、被爆しました。(投下時にいなかったので間接被爆という)

主に科せられた仕事は、死体をトラックに積み上げることでした。なんとも言えない光景で、放射能の影響で仲間も次々に亡くなりました。自分が生き残っただけでも不思議だったそうです。

しかし、原爆の怖さを知ったのはそれからでした。まず、自宅に戻ってから両太股が異常に腫れました。医者にも門前払いされ、自力で何とかするしかありませんでした。鈴木さんは大きな賭に出て、自分で歯磨き粉を患部に塗るという治療を2年間続けて腫れがひいたそうです。しかし間もなく再発し、病院で麻酔なしの手術をしたところ現れたのは黒い血でした。これは患部が腐っていたことを意味していました。

他にも急に体が硬直し注射の針も折れて手もつけられない状態が3日間続く症状が年に数回、5年間続いたりしました。健康診断では食道と腸が放射能で溶けていたことが分かり、その8時間に及ぶ手術ではいきなり心臓が止まったなど(「ご臨終です」とまで言われた)苦しい日々が続いたそうです。・・・

<Tさんの感想>

このインタビューでは、原爆のことよりお話をしても

らった方の人間性にすごく感動しました。鈴木さんは、自分の経験が信じてもらえなくても少しでも多くの方に知ってもらいたいとおっしゃっていました。この貴重な体験を聞くことができて、本当に良かったと思います。

(2)増田教授の講義

5月23日、広島フィールドワークの事前学習として、広島に原爆投下に至までの歴史的背景や具体的な戦争状況を知ること目標に、名古屋大学法学部教授の増田知子先生を招いて講義をしていただいた。次のような授業計画で実施した。

13:10~13:20 挨拶、自己紹介、私の家族の戦争体験
黙祷10秒

13:10~13:20 1)「戦争体験を聞く」の生徒発表
2) その発表に対する増田先生のコメント
3) 質疑応答

13:50~15:00 ビデオ 原爆投下10秒の衝撃
「どうしてこんな核爆弾を米国は日本に落としたのだろうか？」

質問 皆の考えを聞く、まとめ

授業後に、生徒の学びの振り返りとして今回の講義について感想を集約して、増田先生からコメントをいただきました。

<生徒1の感想>

私は戦争が嫌いです。辛いことです。人間の欲望のままに事を起こせばひどいことになります。もう二度と戦争はあってはならないことです。そのためにも事実をしっかり受け止めていきたいのですが、人の死に行く姿はとても受け入れられません。矛盾したことです。どうすればよいのでしょうか。

<増田先生のコメント>

人の死や人が傷ついた姿を直視できないというのは自然なことだと思います。私も実はアニメの「はだしのゲン」が苦手です。全部見ることはできません。こうした拒否反応は、心の中の深いところから起こってくるもので、知識や理性で考えることとは別の仕組みのような気がしています。でも、自分の本当の気持ちあってこそ知識や経験が生きていくのですから、戦争嫌いだ、つらいという気持ちを持っていることを大切にしてください。

<生徒2の感想>

自分の親が被爆者なら僕なら戦争が恐くなってしまい、もう戦争について考えなくなってしまうと思います。しかし、増田先生は、逆にもっと戦争について知ろうとしているのです。すごいと思いました。

<増田先生のコメント>

子供のころ父や親戚からいろいろ話を聞かされたり広島に原爆記念館にいたりしました。自分が原爆の被害

を受けた人の子供なんだということをととても重く感じました。また、自分は歴史の大きなできごととつながっているという実感を持ちました。ですから、原爆被害の話は、本当は、嫌なこと、恐いこと、気持ちの悪いことだったと思うのですが、子供ながらに、これは、自分の原点だということのこだわりがあったように思います。

＜生徒3の感想＞

戦うことに反対する人はどれくらいの人数だったのかと思いました。みんなが反対すれば、戦争がなくてもよかったんだろうと思いました。今の世代ががんばって戦争のことを学び、ずっと下の世代まで伝えていかなければとあらためて思いました。

＜増田先生のコメント＞

「戦争は嫌いだ、戦争に反対だ」と心に思うことと、実際に言葉や態度に表すこととの間には、大きな違いがあります。反対するというのは、実際に言葉や態度で示すことができた人々がどれくらいいたのか？という質問になると思います。戦争に反対したり、戦争を進める政府や軍を批判することは国の裏切り者とされ道徳的にも法律的にも許されないこととなっていました。そうした中で、戦争に反対の行動をとろうとするには、殺されようがかまわないというくらい、とてつもなく勇気と信念が必要だったのではなかったかと思います。政府は、こうした勇気ある人々が現れることを恐れ、心に思っていることを言葉にできないようにするため、言論や思想の弾圧を行いました。中国との全面戦争中に、この戦争は何のためにしているのか？見通しのない戦争を始めた政府は無責任だと抗議した勇敢な代議士もいましたが、すぐに議会から除名され発言を封じられてしまいました。

＜生徒4の感想＞

増田先生のような人がいると戦争のつらさや残酷さがみんなに伝わり、このような過ちが起きなくなると思いました。

＜増田先生のコメント＞

一つの声をどこまで伝えていけるかは、その声を聞いたあなたにかかっています。私の声を聞いて何を感じたのか、それをいつか誰かに伝えてください。

増田先生の講義についての生徒の感想は、若い感性と柔軟さを感じるものが多くありました。平和や人権の問題を「自分との関わりを持って」考えられる感性と行動力を身につけた人になって欲しいものです。

(3)杉原千畝記念館訪問

5月24日（金）に中学3年の総合学習の一環として岐阜県加茂郡八百津町の杉原千畝記念館を訪問した。6月に行われる演劇鑑賞会は劇団銅鑼の「センボスギハラ」が上演され、その演劇の理解をより一層深めるためにも訪問を決定した。

この記念館は、杉原千畝の故郷八百津町を見晴らす丘陵地に建てられた2階建ての木造の建物である。1階部分は杉原千畝の業績が一目でわかる展示室とリトアニア領事館の執務室を再現した「決断の部屋」がある。2階は、企画展示室・展望棟が設けられている。またこの記念館に隣接してビデオ学習ができるホールもあり、40名の生徒が一斉にビデオを見て学習することができた。訪問当日は、記念館見学と記念館担当者による学習会をA・B組が入れ代わりで行った。

＜杉原千畝記念館での体験学習の感想1＞

記念館では、実物のビザが見れたし、千畝氏の決断の部屋に入ることができたのでとても感動しました。それと同時に、ユダヤ人の扱われ方が写っている写真などを見てすごく悲しい気持ちになりました。「どうしてこんなむごいことが平気でできたんだろう。」と信じられませんでした。でも同じ過ちを二度と繰り返さないためにも私たちはしっかりとこの事実を受け入れないといけないと思いました。千畝氏が行ったことは、本当に素晴らしく心から尊敬したいです。それと自分の持っている可能性を自分で引き出していけるようになりたいです。

＜杉原千畝記念館での体験学習の感想2＞

見た目よりも広いと思える館内では、千畝の資料がたくさんありました。また、順序よく展示してあったのでとても分かりやすかったです。決断の部屋では実際の領事館が再現されていてビデオだけでなく実物を見るのも良いことだと思いました。そして、最も印象に残ったのは2階に展示してあった写真です。ユダヤの人々がどんな生活をさせられていたのか、どんな目にあわされていたのかがわかりました。話を聞いただけでは、「大変だったろうね」となってしまうけど、実際に真実を『見る』ことによって、「大変なんだ」ということが分かります。つまり、文章や話やビデオとでは受ける印象が変わるということです。

記念館での体験学習は本年度、最初の試みであったが、ユダヤ人迫害の歴史や杉原千畝の人道的な業績に触れ、平和の大切さ・人間愛の尊さを感じとらせる貴重な経験となった。また、執務室を再現した決断の部屋では、当時の雰囲気を味わいながらビザ発給の任務の重要性を実体験させることができた。

(4)三雲さんの講演会

6月6日（木）は第二次世界大戦中と戦後日本の民衆の生活の様子を理解するために三雲一三さんに講演会を実施した。

三雲さんは1938年に九州で生まれ、3歳の時、歯科医の父とともに満州の奉天の近くのアンシャンという町に移住しました。終戦時は7歳で中国の混乱の中で幼年期を過ごしました。戦後は命からがら日本に引き揚げまし

たが、父が結核に倒れ、九州の孤児院にあずけられました。終戦後の貧しい生活の中を孤児としてのハンディを抱えながらたくましく成長されました。戦後日本社会の荒波にもまれながら、演劇の世界に身を投じ、現在は劇団うりんこの劇団員として子供たちに夢を与える仕事に携わり活躍されています。

三雲さんの講演会は、満州の生活、引揚者・戦災孤児としての生活に焦点を当て、次のような授業計画で実施した。

- 13:10~13:30 ビデオ「満州開拓と終戦後の日本」
 13:30~14:30 三雲さんの講演「満州での生活、引揚者・孤児としての戦後の生活」
 14:30~14:45 質疑応答
 14:45~15:00 感想「講演会を聞いて」

<質疑応答より>

Q 当時の学校生活について教えてください。

A 野球がさかんでグローブを作った。キレをさいて綿がわりに中に詰めて作った。ボールは落下傘の布を使って作った。中身は石のまわりにヒモを巻いて作った。授業中抜け出して野球をした。女の子は紙で作った着せ替え人形をしていた。紙芝居はあったが、映画教室でディズニーの総天然色（カラー）を見たときは驚いた。民主主義を教えるためにアメリカ文化を教える教育があった。

Q 昔の教科について教えてください。

A 昭和23年~26年だったけど、算数と国語はあった。理科は実験道具がないので、外でカエルを捕まえた。音楽は教室にオルガンが1台あった。「リンゴの唄」を歌った。美術は画用紙がなかった。写生の時は質の悪い紙を使った。

Q 満州で暮らしていて良い思い出はありましたか。

A 満州の広さ、夕焼けが美しい。コーリャン畑が素晴らしい光景でした。冬の凍てつく朝、クギを落とすとキーンと音が響くようなほど澄んだ冷たい空気。大陸の広大さは感動し、今でも良い思い出となっています。

<三雲さんの講演会の感想>

Tさん：本当に食べるものがなくて、障子を貼るノリに紙を入れて食べたというのが心に残っています。自分が同じ状況に置かれたらと思う、戦争は本当にやってはいけないとあらためて思った。

Sさん：「人間て素晴らしいんだ」という言葉を繰り返していたことが心に残っています。毎日勉強ってなんのためにやっているのかという疑問を思っていたけど少し謎が解けたような気がします。勉強がちゃんとできるってすごいことなんだと思いました。私は三雲さんのように親を亡くしたら、戦争についてあんなにしっかり話せな

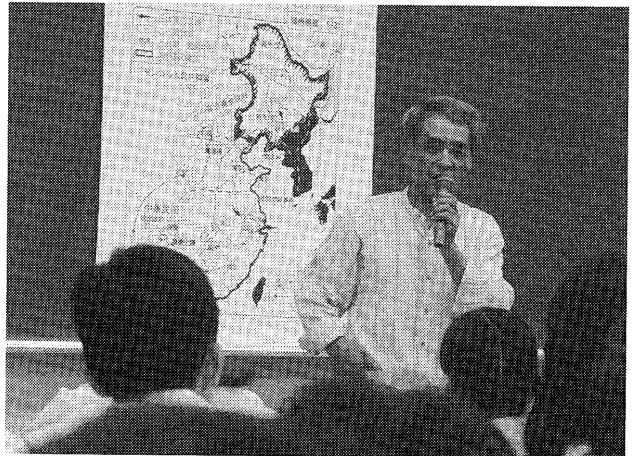
いと思います。

Iさん：日本が満州国を使っていたことは分かっていたけど、ここまで勝手なことをやっていたなんて初めて知った。私は日本に生まれて何の違和感も感じず生きてきた。日本は平和だけど、なんだか心が貧しいような気がした。これからは私たちが作っていかなければいけないんだと思った。

Nさん：糊を食べたら死んじゃうとか思うし、生活がボロボロだったんだなあと思いました。今はご飯もお腹一杯食べられるし、涼しい部屋に居て、教科書もペンもいっぱいあって・・・三雲さんの話を聞いて恥ずかしく思う部分もあった。

N君：僕は今日の話聞いて戦争体験の話より、生き方についての方が心に残った。「自分にウソをつかない」「自分のセンスで歩いていく」これらの言葉はこれから生きていく中で壁にあたった時に自分の進べき道を見つけ出す大切なものになると思う。

三雲さんの講演会は、戦争の悲惨な体験だけでなく当時の満州や中国大陆での日本人の生活をより具体的に生徒に理解させることができた。特に、満州や朝鮮の様子や戦後の孤児としての苦労は、今の教師の指導では空白になりがちな部分をより明確に生徒に伝えることができたと思われる。また、戦後の日本の経済成長の光と陰の部分や自ら考え判断する生き方の大切さなど、生徒の生き方学習に深く踏み込んだ指摘がされていました。



2. 広島フィールドワーク

(1)研究旅行およびグループ別研究の概要

1) 行程

11月6日(水)

- 宮島散策
- 平和セレモニー
- 平和公園(原爆ドーム・平和資料館見学)
- 広島市内の自由行動(平和公園~ホテル)
- 被爆体験証言者の話を聞く会(広島リボンの会 5名)

11月7日(木)

- 広島市内 班別フィールドワーク(午前中)
- 大久野島への移動(広島駅～忠海)
- キャンプファイヤー・肝試し

11月8日(金)

- 大久野島自由レクリエーション
- 元毒ガス資料館館長講話
- 毒ガス資料館見学

2) 指導教官制による班別フィールドワークの指導

A組

- 1班 岡村(美術)
- 2班 杉本(国語)
- 3班 藤田(英語)
- 4班 岡村(美術)
- 5班 佐藤(養護)

B組

- 1班 原(理科)
- 2班 藤田(英語)
- 3班 杉本(国語)
- 4班 佐藤(養護)
- 5班 原(理科)

3) 班別研究テーマと研究の概要

①A組1班 ヒロシマ 広島 HIROSIMA

～広島再生や復興について知る～

A組1班は、原爆投下後の広島がどの様に復興していったのかを調査することにした。原爆の惨状を伝える資料は多く見られるが、原爆から立ち直る資料についての展示は限られているため、原爆資料館職員の山谷さんに直接インタビューすることになりました。

1946年の広島市復興局の設置、平和復興市民大会開催によって、国からの援助を受けられるような法律整備に着手し、1949年8月広島平和記念都市法が制定され国有地の払い下げ、1953年広島市原爆障害者協議会の設置、1956年原爆症専用の病院開設、1957年原爆健康手帳の交付、1956年広島復興大博覧会開催と復興に関わる事業が行われてきた。しかし実際に復興運動の中心になった人々は、民間団体であったという事実を知り、復興には法整備の手続き等、膨大な時間がかかることを知ると同時に、その間にも苦しむ人々のいる事に憤りを感じた。また、被害を受けた時の衝動的な感情だけでなく、先を見すえて何ができるのかを考える大切さを知ることになった。そして広島を復興へと導いた原動力となったのは多くの人々の逞しさと優しさであることに気がついた。

②A組2班 世界目から見た原爆

～世界の人々は原爆をどう思っているのかを知る～

研究当初、「世界目から見た原爆」というテーマで世界の人々の原爆に対する考え方を調査する予定であった

が、研究をすすめるうちに、世界の人々が平和に過ごしていくためには我々は何を大切にしていけばよいかということに興味を持ち、テーマに「大切なもの」を加えることとなった。

訪問先は、1965年にアメリカ人バーバラレイノルズさんによって作られたワールドフレンドシップセンターに行くこととなった。ここは、世界の人々に広島のことを知ってもらうための交流事業や講演会等の活動を行っており、世界の人々の原爆に対する考え方を知るにはたいへん適していると思われた。

実際のインタビューで、「原爆直後のアメリカの反応」を教えてもらい、当時のアメリカ人が原爆投下の事実あまり知らなかったり早期終戦説を唱えたりして原爆の実態が伝わっていなかったことを知った。また、各国の原爆についての教え方もまちまちで、「HIROSIMA」という地名は知っていても、今だに「広島の水は飲めるのか」とか「草木は生えているのか」という質問が聞かれ、世界の人々の原爆被害の知識は大変低いということに驚かされた。

今回のフィールドワークを通し、世界の人々の考え方に触れるとともに、さらに今私たちが平和のために何を大切にすべきかということを考える機会となった。

生徒たちは平和のために大切にしたいこととして次の2つのことを上げている。一つは、温かい環境を作ること、幸せの原点は小さいころの家庭環境の温かさであり、他人に対する優しさや思いやりを育てる温かい環境をつくるのが大切。二つ目はそれをどんどん広げていくこと。家庭から学校へ、日本から世界へとこの二つのことを念頭において平和な世界を築いていきたいという考察でしめくくられた。

生徒の感想より

「平和は平和なことが当たり前となっている今、それは私たちが頑張らなければ保たれない。知らなければならぬ。忘れてはならない。」

③A組3班 放射能による人体への影響

(どの様な影響がでるのか)

原爆で目に見えない放射線によって多くの人が傷ついた。この放射線による被害はどのようなものかということを知りたくて広島大学原爆放射線医学研究所にフィールドワークに行くことになった。

生徒たちは、研究所の宮川清さんにお話を伺い、原爆放射線による遺伝子への影響や被爆実態の調査について学ぶことができた。資料としては、原爆被爆後の放射被爆症状・原爆放射線誘発癌発生の時間経過・被爆後の悪性腫瘍発生時期・急性放射線被爆の症状などが示され、被爆後25日で死亡率40%であること白血病は被爆後10年で減少するが、それ以外の癌は約10年後から増加してく

ることを知ることができた。

生徒たちは事前研究の段階から放射線による人体への影響について詳しく事前学習をし、さらに研究所での話を聞き、様々な原爆症の専門的な病名や統計上の数値に触れてきた。しかし、生徒の印象に残ったものは研究所で見せられた放射線を浴びた臓器であった。

生徒の感想より

「今回のフィールドワークで意味があったことは、どんな症状がでるのかや何万人亡くなったかということを知れた部分ではなく、研究所で見せられた資料や標本が発する『空気』みたいなものを感じることができたことだと思います。この『空気』を感じて初めて、戦争がとんでもなく恐ろしいものなのということを実感できた。このフィールドワークは、テーマを詳しく知るというよりそのテーマの調査を通してこの『空気』を自分たちで感じるために行われたものなのだろうと思います。」

④A組4班 爆風の威力

～爆風によって起きる人間への影響～

原爆の人体への影響というと、まず放射能が一番先に思い出されますが、この班は過去に放射能についての調査が多く残っていたので、今までにない調査ということで、爆風が人体に与える影響を調査することになった。

訪問先は、広島大学原爆放射線医科学研究所で、ここで学んだことは、原爆の被害について熱線・爆風・放射能という3つにわけて詳しく理解できたことであった。原爆のエネルギーのうち爆風が50%を占め、衝撃波により爆心地の風速は秒速280メートルにのぼった。熱線などによる火災とあいまって竜巻を伴う火事嵐現象を生じさせたことが分かった。生徒たちの印象に残ったことは、爆風の衝撃波によって建物に壊滅的な被害をもたらすとともに、そこに居た人が一瞬にして酸欠状態になったり、気圧の高低の差によって人体の中の臓器や目が体外に飛び出したりする事実を知ったことであった。

生徒の感想より

「私たちはこのフィールドワークにより戦争の悲惨さを痛感しました。一昨年同時多発テロが起き、今年は北朝鮮の核開発問題が起き、もし核兵器が今使われたら広島・長崎以上の被害が出ます。私たちは一日も早く核開発を中止させるべきです。今、拉致問題が注目されています。なぜこのようなことが起こったのか第2次世界大戦の歴史を私たちはもう一度勉強しなおすべきだと思います。」

⑤A組5班 被爆2世の心情

～原爆を昔のことだと思わないため～

被爆2世の心情というテーマで広島弁護士会館に

フィールドワークに出掛け、被爆2世の杵木里栄さんと下中奈美さんにお会いして話をうかがうことになった。

杵木さんは原爆を落としたアメリカだけが悪いのではなく、それを生み出してしまった「戦争」を憂えるべきであると述べ、当時の時代状況や人間の考え方など広い視野から見る必要を教えてくださいました。また下中さんは、実際に外国の人に原爆の恐ろしさを伝える活動を通して、外国の人に理解してもらうことが難しいかを語ってくださいました。また、これからの世代の人は、平和の意味をもう一度深く考え、相手を尊重する姿勢を忘れないで欲しいと訴えられました。さらに最近出版された「百人の村」という本を読み、日本の基準が世界の基準ではないことをわかる必要があるとも言われました。

生徒の感想より

「被爆2世の方は病気を患っている方も見えますが、ほとんどは普通の人と同じように前向きに生きています。被爆2世だからといって差別したり、気遣いをしすぎることなく、一緒に平和な世界になるように考えていきたいです。」

⑥B組1班 戦時中の教育

～戦時中の教育内容を知る～

「国のために死ぬ」という戦時中の日本の教育は一体どのようなものであったのだろうかということを考えるために、旧日本軍の海軍兵学校があった江田島に出掛けた。江田島は現在海上自衛隊の幹部候補生学校・病院・第一術科学校があり、旧日本軍と自衛隊を対比させながら学ぶことができる。

フィールドワークは、第一術科学校広報課の西山芳樹さんを訪ね、戦前の教育について聞き、尽忠報国・教育勅語・国体護持・総力戦という言葉の意味や当時の人々の考え方に触れることができた。また、自衛隊との違いや現在の訓練についても教えていただいた。

生徒の感想より

「今の憲法からすれば矛盾である自衛隊も無くすわけにはいきません。愛する国を守るためということは変わらないけど、それは行動しだいです。昔のように無理やり教え込まれるのではなく、今の自衛隊は守るために自ら学ぶという体制で悪くないと全体を通して感じました。」

⑦B組2班 原爆の傷痕

～原爆放射能が与えた人体への影響～

原爆放射線の人体への影響について、後遺症・殺傷能力・心の傷を調べるために放射線影響研究所を訪ねた。火傷をおった人と水との関係・年齢による被爆症状の違い・残留放射能について・染色体への影響・菌のエナメ

ル質への影響などかなり専門的なことまで丁寧に教えていただきました。

生徒の感想より

「事前学習では放射線影響研究所と白血病のことについて調べて質問を準備していたが、フィールドワークでは〔水を飲んだ被爆者が、すぐ亡くなった原因が緊張感が解けたことによる〕や〔胎内被爆でなければ2世に遺伝することはない〕ことなど、今まで知らなかった真の答えを得ることができた。」

⑧B組3班 原爆の爪痕

～被爆後の広島を知る～

フィールドワークは、本川小学校と広島YMCA・原爆被害者相談員の会の2箇所に行くことになった。本川小学校は爆心地から360メートルの距離にあり当時被爆した校舎の一部がそのまま保存されている。

広島YMCA・原爆被害者相談員の会で被爆者、梶本さんの話を聞くことができた。梶本さんは生徒と同じ14歳の時に被爆されました。原爆の悲劇を思い出したくないと首をふるのではなく、次の世代にその悲しみを伝えていきたいと語りその姿に生徒はひどく胸を打たれた。開戦時は提灯行列をして喜んだこと、配給が滞り、庭で野菜を作りカエルを食べたこと、そして原爆投下の窓の外に青光りが走り一瞬のうちに町は何もなくなって鼠の腐った臭いとあばらの鉄骨が見え、とても静かな光景だったことを淡々と語られました。生徒たちはその話を聞き、自分たちは経験していないのにひどく怖い印象を感じたようだった。

生徒の感想より

「被爆者の方のお話を聞く機会が二度あり、今までとは違う戦争や戦場の臨場感を味わうことができた。そして、原爆の恐さ、戦争の悲惨さは今でも心に深く残っています。きっとこれからも・・・。」

⑨B組4班 リトルボーイ

～原爆が人体に与えた影響を知る～

広島復興に欠かせなかったのが、被爆者の治療に直接関わった病院である。日本赤十字広島支部は原爆投下当時陸軍病院で爆心地から1.5キロにあり多くの人が助けを求めてやって来ました。戦後は原爆被爆者や原子力発電所の事故で被爆者の治療を行っています。

生徒たちはこの広島支部の脇谷さんにインタビューをしました。この脇谷さんの話の中で生徒が印象に残ったのは、マルセルジュノー博士の功績でした。原爆の被害を聞き、15トンの医薬品と病院用資材を広島に運び救護活動に貢献しました。また、被爆者に対する差別の問題では、特に被爆者同士の間で差別があるという事を聞

き、驚嘆していました。

生徒の感想より

「私は被爆者の間でも差別があるということを聞いてすごくびっくりしました。同じ被爆体験をしているのだから仲良くすれば良いのに・・・症状が重いからといって差別するのは可愛そうです。その人たちは何も悪くないのにおかしいと思います。世界のどこへ行っても差別されることなく安全で幸せに暮らせるようになって欲しいものです。」

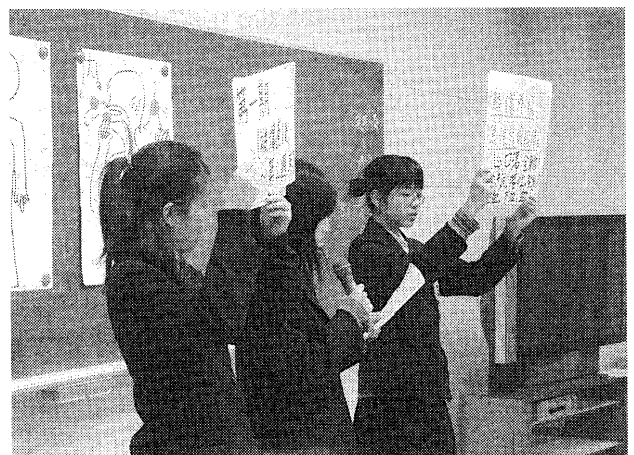
⑩B組5班 昔の軍隊と今の自衛隊の違い

～昔の軍隊と今の自衛隊の違いを知る～

フィールドワークの訪問先は海上自衛隊呉教育隊で呉地方隊の歴史、任務について調べることになった。現地に到着すると、呉地方総監部・護衛艦いなづま・呉地方隊資料館に案内された。総監部ではコンピュータを使った自衛隊の説明があり、旧海軍と自衛隊の違いについても詳しく丁寧に教えてもらえた。

生徒の感想より

「僕たちは昔の軍隊と今の自衛隊の違いを知るというテーマを持ってフィールドワークに出掛けた。そこで分かったことは、今も昔も、自衛隊は国と国民の財産を守ることで実質的には目標は同じだということ。与えられ任務を遂行する。戦争が始まったら自衛隊が一番最初に出動する。昔の軍隊と大きく違うことは、憲法9条に基づき相手が来たら防ぐということである。自衛隊の人たちの意思の強さ、責任感の強さをしみじみと感じ、平和を守る重みを感じた一日であった。」



Ⅳ. アンケート調査と結果

一年間の総合学習終了後にアンケートを実施した。今年度の総合学習の学習目標「人々の心に触れて、平和の尊さを考えよう」に関連する箇所を中心にアンケートの結果をまとめた。本年度の中学3年生の総合学習は、戦争体験、戦争被害に関する直接的な体験をする企画を数多く用意し、「平和」を生徒の情意、心情に訴えるという

方針を採った。この方法論が生徒にどのような影響を与えたかをアンケート結果から考えてみる。

戦争体験者が少なくなる中で、生徒が戦争体験を身近な人から聞く機会はどれくらいあるのか。また、マスメディアを通して戦争を仮想現実的に体験することの多い現代の生徒が、世界情勢、世界の紛争や戦争について家族や友人と話し合うことはどのくらいあるのか。また、草の根の国際交流や平和を促進するための具体的行動をした経験をのべる生徒はどれくらいいるのか。まず、この事実を始めに確認してみる。

アンケート項目と回答率

- 1) 自分の身近で戦争体験を持つ人から話を聞く機会がある。
 とてもある 23% わりとある 40%
 あまりない 29% 全くない 8%
- 2) 家庭で世界情勢や世界平和について話し合ったことがある。
 とてもある 11% わりとある 41%
 あまりない 35% 全くない 13%
- 3) 友達と世界情勢や世界平和について話し合ったことがある。
 とてもある 5% わりとある 35%
 あまりない 42% 全くない 18%

身近な人から戦争体験を聞くについての肯定的回答は63%、家庭での平和に関する会話の肯定的回答は52%、友人との会話で肯定的回答は40%となっていた。比較する対照がないのでこの数字が高いか低いかを判断するのは難しいが、総合学習で国際情勢や世界平和をテーマにすることがきっかけとなり、家族や友人とこのようなテーマについて話したという意識が反映されていると考えることができる。また、生徒にとって身近で話しやすい人間関係になるにしたがって戦争や世界平和に関する重たいテーマを話題にすることが少なくなるという傾向があることがわかる。

- 4) 国際理解や世界平和を促進させるために自分で何か行動をおこしたことがある。
 とてもある 5% わりとある 12%
 あまりない 59% 全くない 24%

国際理解や世界平和を促進するための具体的行動をおこしたと肯定的に回答した生徒は17%であった。行動をおこしたことが「全くない」と否定的な意識を持っている生徒が24%と高くなっている。行動の変容まで引き起こすことの難しさを表していると考えられることもできる。

次に、1年間の総合学習を通して平和に関する意識、態度で特徴的な事実をあげてみる。

アンケート項目と回答率

- 5) これからも自分の身近で戦争体験を持つ人から話を聞きたいと思う。
 とても思う 12% まあ思う 66%

あまり思わない 21% 全く思わない 1%

- 6) これからの国際理解や世界平和を促進するために自分で何か行動をおこしたいと思う。

とても思う 15% まあ思う 62%
 あまり思わない 14% 全く思わない 9%

戦争体験を、これからも聞きたいと考えている生徒が78%、機会があれば国際理解や世界平和のために行動したいと肯定的に答えた生徒が77%であった。

さらに、自由記述のアンケート項目、「国際理解と世界平和のために私たちがしなければならないことは何だと思いますか」では、「差別や偏見をなくす」、「過去から学ぶ」、「異なる国の文化を理解し認め合う」、「まず自分の国を理解する」、平和の尊さを次の世代に伝えていく」といった国際理解と世界平和を促進するための本質をつかみ取った記述が数多く見られた。

「平和」を生徒の情意、心情に訴えるという方法論、つまり戦争の悲惨さ、恐ろしさ、平和の尊さを疑似的ではあるが体験し「人々の心に触れる」ことによって、国際理解と世界平和への完成が高まり、積極的な態度で考え、取り組んでいこうとする意欲へとつながる機会を提供できたと言える。

V. 今後の課題

一年間を通し、平和学習に重点が置かれ、国際理解についての計画が不十分であった。平和学習のベースとして、紛争や戦争の原因となる人々の考え方の違いをしっかりと理解させることが必要である。戦争の背景にある思想・民族・宗教の対立・貧富の差の問題を押さえ、ものの見方や考え方の違いを明らかにし、自分の価値観だけで判断せず相手の側に立って考える姿勢を身につけることが大変重要になってくる。平和学習が単に、過去の戦争を振り返り原因を探り、過ちを繰り返さないようにしようというだけでは、歴史学習に終わってしまう。将来おこりうる様々な国際紛争・戦争に対して柔軟な思考で考え対応していく能力を身につけさせることが大切である。そのために国際理解と平和学習という両輪によって進めていく必要がある。今後、同じテーマを行う高校2年の総合人間科や新教科群の「国際コミュニケーション」で国際理解面の学習を補っていく必要がある。